

生きるヒント3

スリー

——^{いや}傷ついた心を癒すための12章——

五木寛之



角川文庫

い スリー
生きるヒント 3

きず こころ いや しょう
— 傷ついた心を癒すための12章 —

いつ き ひろゆき
五木寛之



角川文庫 10037

平成八年六月二十五日 初版発行

発行者 角川歴彦

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

電話 編集部(〇三)三三三八―八四五―

営業部(〇三)三三三八―八五二―

〒一〇二 振替〇〇二三〇―九―九五二〇八

印刷所 旭印刷 製本所 本間製本

装幀者 杉浦康平

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

©Printed in Japan

スリー
生きるヒント3

—傷ついた心を癒すための12章—

五木寛之



角川文庫 10037

生きるヒント^{スリ}3

目次

生きるヒント3—^{スリー}傷ついた心を癒すための12章

1章	楽む(たのしむ).....	7
2章	軽く(かるく).....	29
3章	味う(あじわう).....	59
4章	尽す(つくす).....	79
5章	堕る(おちる).....	101
6章	食う(くう).....	115
7章	離す(はやす).....	129

8章	闘う(たたかう)	153
9章	注ぐ(そそぐ)	165
10章	許す(ゆるす)	179
11章	悩む(なやむ)	193
12章	幸せ(しあわせ)	207
付・「対治 ^{たいじ} 」と「同治 ^{どうじ} 」について		220
著者からのメッセージ		237
解説	山川健一	241

1章

楽しむ
(たのしむ)

先日、ひさしぶりで横山隆一さん^{よこやまりゆういち}にお目にかかって、おしゃべりをしました。

横山隆一さんといえば、言うまでもなく日本漫画界の最長老です。世間の常識からいえば横山センセイと書くべきでしょう。

代表作『フクちゃん』は一世^{いつせい}を風靡^{ふうび}した名作。昨年は漫画家としてはじめての文化功労者にも選ばれて、とても照れくさそうでした。

すでに八十五歳をすぎておられるのに、みじんも老人くさくありません。いつもちょっとはにかんだような表情で、好奇心といたずら心ではちぎれそうな感じでいらっしゃる。

少年のような、という月並みな^{つきな}表現が、これほどぴったりにくるかたも、めったにおられないのではないでしょうか。

小柄な体つきですが、歩きかたがキビキビしていることにはびっくりさせられます。しかも早口でよくしゃべり、よく食べ、お酒にも目がない。なんとも凄^{すご}い大先輩ではあります。

ぼくはひそかに、そんな横山さんのまねをして生きたいと思いつづけてきました。といっても、長寿^{ちようじゆ}というだけのことではありません。ながく生きることは、たしかにそれだけでも大したことでしょう。しかし、ぼくが横山さんをあこがれるのは、その点だけではないのです。

テレビのコマーシャルに出演されているキンさん、ギンさんのおふたりをはじめ、わが国には百歳以上の長命者が五千六百人もいらっしやるらしい。いまの時代に長生きはめずらしいことではありません。いや、むしろあの手この手で、いやおうなしに長生きさせられる時代、といってもいいのではないでしょうか。

ぼくが横山さんをうらやましく思うのは、この大先輩が、

「日々を楽しく生きる達人」^{たつじん}

のように思われるからです。

「名人」というと、ちょっと気取った感じがします。横山さんには、やはり「達人」とか「上手」^{じょうず}とかいった言葉がふさわしい。

ざっくばらんで、飄々^{ひょうひょう}として、遊び心にあふれていて、だれに対してでも決して威張^{いば}らない。ぼくのような無遠慮^{ぶえんりょ}な後輩にも、友達のようにフランクに接してください。

しかし考えてみると、そんなかたが、ぼくのまわりに、ほかにいらっしやらないわけではありません。いや、横山隆一さんよりもずっとながく存じあげている大先輩も、幾人もおられます。それにもかかわらず、自分が横山さんの生きかたにあこがれるというのは、一体なんだろうと考えるのです。

それはやはり、横山さんがいつも「楽しそう」に生きていらっしやるか

らではないのか。すくなくとも横山さんが身のまわりに漂ただよわせている「樂しげな氣配」のせいではないか。そう思われてならないのです。

氣配、というのは、微妙びみょうなニュアンスをもった言葉です。このところ「氣功」とか、「氣の流れ」とか、「氣で癒いす」とかいった活字をよく目にするようになりました。

先日も山手線の駅前で、いきなり目の前に若い女性が手をつきつけてきたので、驚いたことがあります。

「なにかを感じませんか」

と、そのジーンズ姿の娘さんがまじめな顔で言う。

「このわたしの掌てのひらから、今あなたに氣が送られているのです。ほら、すこしずつ顔が温かくなってきたでしょう。ね？」

ぼくは東洋医学でいうところの「氣」の存在を信じている人間です。むずかしい理論とは関係なしに、以前からごく自然に、直感的にそれを認め

てきました。それも神秘的な立場からではなく、普通のこととして「へ気」の働きを信じているのです。

しかし、街頭で突然、「気を感じますか」と迫られるのは閉口です。たしかに顔が温かくなってきたのは事実ですが、それは通行人たちにじろじろ眺められることが照れくさかったからじゃないでしょうか。

ともあれ、横山隆一さんとむかいあって、しゃべったり、笑ったりしていますと、こちらに不思議な変化が感じられてくるのですね。目に見えない「へ気配」が自然に自分にも伝わってくる。それをなんと呼べばいいのか。へ楽しいげな気の流れ」とでも仮りに名づけておきましょう。八十五歳の老大家が田舎のいたずらっ子のように目を輝かせながら、身ぶり手ぶりで話される内容のおもしろさもさることながら、そのあいだじゅうずっとこちらへ流れてくるへ楽しいげな気の流れ」をまざまざと感じるのです。

それは常に睡眠不足でぼうっとしているぼくの神経細胞を、軽やかに刺

載^げしてくれます。おしゃべりをしているうちに、しだいに陽気になってくる自分を感じます。まるで相手の活気が、こちらに伝染^{でんせん}してくるかのような変化があらわれてくるのです。それは香港^{ホンコン}型やソ連型の感冒^{かんぼう}のウイルスよりもっと感染力がつよい波動です。

じんわりと、いつのまにか横山さんのへ楽しみの気^きが、こちらのへ気^きを目覚めさせて、ちょうど音叉^{おんさ}のように共振しはじめるのを感じるのとはとても不思議な感覚です。

「もうずっと昔のことだけどね」

と、秘密をこっそり打ち明けるかのような口調で、いつか横山さんが話し出されたことがありました。

「鎌倉^{かまくら}の自宅から駅まで歩くあいだが退屈^{たいくつ}なんで、なにかおもしろいことはないかと考えたんだ。そしたら、あるときふと、いいアイデアがうかんでね。

花の種をいろいろ買ってきて、それをポケットに入れて家を出ることにしたんだよ。駅への行き帰りに、歩きながら道の脇の立派なお屋敷の庭に、パツ、パツとポケットの中の種をまく。人が見てないときに垣根かきねごしにこっそりね。

そうしたら、やがて道の両側のりっぱなお屋敷の庭に、マツバボタンやら、ヒマワリやら、いろんな草がニョキニョキはえてきてさ。やがてとってもきれいな花が咲いた。

あれは楽しかったねえ。まるで自分が花咲か爺さんになってもなったようないい気分だったなあ」

月並みですが、鎌倉のイメージといえば、なんとなく格調高いお屋敷のたたずまいが連想されます。手入れのゆきとどいた風雅ふうがなお庭のあちこちに、すこぶる場ちがいな草花が不意に出現する風景は想像しただけでも愉快ゆかいです。お出入りの庭木職にわきしよくの人たちも、さぞかしげんそうな顔で首をひ